

師系について 奥田亡羊

書店の短歌コーナーに行くといま目立つところに置いてあるのは永田和宏と河野裕子の本である。四十年にわたってお互いを詠んだ歌をまとめた『たとえ君』は文庫本にもなった。『家族の歌』は河野裕子の晩年をともに過ごした家族の歌と文章をまとめたものだ。もちろん読んで感じることはあるが、現象として自分から引き離して見たとき、これらの本の落ち着きどころが自分の中に見つけられずに困っていた。これは歌が求める歌物語なのか、前衛短歌運動の私性との関係はどうなっているのか。なにも大上段に構えて短歌史的な意味は何かと問う必要はないが、それでも家族で歌を詠んでいるのは佐佐木幸綱の場合と同じである。しかし、幸綱が家族を語る本を出すとは考えにくい。

このようなことを考えていたとき、目に止つたのが『梁』八十六号で始まつた吉川宏志と大口玲子の往復書簡だつた。ふたりの歌人が東日本大震災、福島原発事故以後の互いの歌を読み、所感を述べ合う内容である。相手の歌を読んだ印象を伝えつつ、短歌に対する自分自身の率直な思いを表明している。そこで語られているのは現実と歌の関係性の問題、思想詠の問題、自然詠の問題、いずれも短歌の大問題ばかりだ。一読、現代短歌の最前线がここにあるという印象を受けた。この往復書簡は今後、歌壇でしかるべき形で論じられることになると思うので、大きな問題はそちら

にゆずろうと思う。わたしがそれらの大問題を考えながら、同時に往復書簡から漠然と感じたのは師系の問題であった。

たとえば吉川宏志は今後、何十年も続く原発事故をどう継続的にうたつてゆけばよいかという問題に対し、前衛短歌のように比喩（メタファー）を用いてうたうことへの違和感を語っている。その発言は次のようなものだ。「メタファーでできている世界をメタファーで表現しても、すごく間接的なものになってしまつ。そうであるから、デモなどの身体的な表現に、私はむしろ関心をもつてしまふのかかもしれません。」加えて吉川は「人間と言葉は結びついていること、言葉だけが浮遊してしまつてはいけない」と自らの歌に対する姿勢を明確にしている。この身体性、直接性の背後にやはり河野裕子の存在を感じないわけにはゆかない。

一方、大口玲子の「この世の片隅で」（短歌研究二〇一三年九月号）の五十首すべてに社会的なニュースの断片が詞書のようについていることの意味を問う吉川に対し、大口は「日々沉迷を深めてゆくこの世界の現実とそこから来る不安を感じない日は一日もないのですが、それらはすべて作品の外側に出して詞書とし、宮崎で子どもと暮らすかけがえのない日々に専心して短歌を作らうと考えた」と答えている。世界の現実と不安を作品の外側に出すというのは、それらを歌の文脈として抱え込むことへの逆説に他ならないのであろう。この言葉にわたしは世界を鏡として自分を映し出した佐佐木幸綱の作品を思い起こした。

もちろん何となくの「感じ」に過ぎない話なのである。だが、「梁」の往復書簡を読んで、わたしは永田和宏と河野裕子の本の世界に無心で入ることができるようになった。